

孙宗光先生喜寿纪念论文集

日本语言与文化

刘金才 王亚新 彭广陆 陈力卫 编

北京大学出版社



孙宗光先生喜寿纪念论文集

日本语言与文化

刘金才 王亚新 彭广陆 陈力卫 编

北京大学出版社



图书在版编目(CIP)数据

孙宗光先生喜寿纪念论文集: 日本语言与文化 / 刘金才, 王亚新, 彭广陆, 陈力卫编. —北京: 北京大学出版社, 2003. 12

ISBN 7-301-06779-8

I. 孙… II. ①刘… ②王… ③彭… ④陈… III. ①日语-研究-文集 ②文化-研究-日本-文集 IV. H36-53②G131.32-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2003)第 107711 号

书 名: 孙宗光先生喜寿纪念论文集: 日本语言与文化

著作责任者: 刘金才 王亚新 彭广陆 陈力卫 编

责任编辑: 杜若明

标准书号: ISBN 7-301-06779-8/H·0950

出版者: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

网 址: <http://cbs.pku.edu.cn>

电子信箱: zpup@pup.pku.edu.cn

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62753334

排版者: 北京华伦图文制作中心 82866441

印刷者: 北京大学印刷厂

发 行 者: 北京大学出版社

经 销 者: 新华书店

890 毫米×1240 毫米 A5 15.5 印张 420 千字

2003 年 12 月第 1 版 2003 年 12 月第 1 次印刷

定 价: 28.00 元

音に聞く
 黄塵はいつこ
 梅薫る
 新生中国
 燕京の春
 金田一春彦



音に聞く
 黄塵はいつこ
 梅薫る
 新生中国
 燕京の春

金田一春彦先生手书

目 录

燕京の春

金田一春彦

语言篇

- | | | |
|------|-----------------------------|-------|
| 3/ | ことばの伝説 | 田中章夫 |
| 13/ | 言語地理学の新しい展開 | 馬瀬良雄 |
| | | 中東靖恵 |
| 35/ | 「ひと（人）」「もの（者）」「人間」「人物」の使い分け | 佐治圭三 |
| 57/ | 寅太郎の言語発達 | 奥津敬一郎 |
| 79/ | 浅析系助词“や”与“か”在意义、用法上的主要差异 | 潘金生 |
| 97/ | 『囲城』の日本語訳に見られた間接発話行為 | 徐昌華 |
| 111/ | 「私は土木工学が専門だ」等句式的分析及同汉语的对比 | 王亚新 |
| 131/ | 異文化接触場面における言語行動意識の気づきを促す実践 | 徳井厚子 |
| 145/ | コミュニケーションを育む目標を目指して | 趙華敏 |
| 157/ | 日本語の目的構文の基本的構造 | 劉振泉 |
| 173/ | 日本語の複合格助詞について | 馬小兵 |
| 183/ | 山口県文書館蔵角筆文献「古文真宝前集」について | 柚木靖史 |

- | | | |
|------|----------------|---------|
| 199/ | 中国から来た日本語四字成語 | 顧明耀 |
| 221/ | 中日料理名の比較 | 彭広陸 |
| 249/ | 日语“虎”词考 | 李国栋 余翌珍 |
| 255/ | 日本人汉字观之流变 | 潘钧 |
| 271/ | 中日同形词之间的词义互补问题 | 陈力卫 |

文学・文化篇

- | | | |
|------|---------------------------|-------|
| 293/ | 大江健三郎の文学 | 平岡敏夫 |
| 301/ | 民話表現論序説 | 田中瑩一 |
| 325/ | 西鶴遺稿の挿絵 | 岡本勝 |
| 343/ | 「ほととぎす」を通してみた『枕草子』 | 李曉梅 |
| 361/ | 異邦人のまなざしと翻訳文学のオリ
ジナリティ | 陸晚霞 |
| 381/ | 安芸国分寺跡出土の木簡・墨書土器をめ
ぐって | 佐竹昭 |
| 401/ | 熊阪 台州『文章緒論』について | 大久保隆郎 |
| 421/ | ブックロード | 王勇 |
| 435/ | イザナミ、オホケツヒメ神話の原像 | 楊剛 |
| 451/ | 西鶴作品中的主情主义伦理 | 刘金才 |
| 467/ | 信息化、全球化时代的日本新宗教 | 金勛 |
| 475/ | 中国の高等教育 | 苑複傑 |
| 485/ | 回顧と感謝 | 孫宗光 |

~~~~~

493/ 编者后记

# 语言篇





# ことばの伝説

田中章夫

孫先生ともご親交があつた、故・徳川宗賢さんが生前よく「ことばの伝説」ということを言っていた。ことばについて、世間でよく言われ、一般に広く知られているにもかかわらず、いざ調べてみると、はっきりした証拠がなく手がかりがつかめない、といった類いのことを「ことばの伝説」と名付けたわけである。そうしたものの、いくつかを取り上げて、わたしなりに調べてみたことを報告することにする。

しかし、もともと証拠がつかみにくいことを承知のうえでのことなので、歯切れのいい結論は期待しえない。むしろ問題提起としてお読みくださって、ご意見やご教示をお寄せいただければ幸いである。

## 1. ウナギの引き札

日本の広告や、その歴史について書いたものを読むと、ほとんど例外なく、江戸時代に平賀源内が書いたウナギの引き札（チラシ広告）のことをとりあげている。そして多くは、土用のウナギの効用を説いて、夏場に売り上げが落ちるウナギ屋の窮状を救ったなどとしている。

しかし、『平賀源内全集（平賀源内全集顕彰会・1989年・平成1）』や源内の伝記の類、たとえば、城福勇『平賀源内（人物往来社・1986年・昭和61）』、芳賀徹『平賀源内（朝日新聞社・1989年・平成1）』

などには、有名な「清水餅の引き札」をはじめ、さまざまな引き札の文案が紹介されているにもかかわらず、ウナギの引き札のスク립トは見あたらない。ただし、土用のウナギについては、源内の随筆や雑文の類を集めた『天保佳話（1838年・天保8）』に、つぎのような記述がみられる。

#### 土 用 鰻 鰻

土用の丑の日に鰻鰻を喫ふ事は鰻鰻は夏瘦を療するものなればなり殊に丑は土に属す土用中の丑の日は兩土相乗ずるものなり萬葉に憶良等に我もの申す夏瘦によしといふなるむなきめしませとあれば古より夏瘦には鰻を食事と見えたりウム相通

しかし、すくなくともチラシ広告の形で、平賀源内が土用のウナギにかかわりを持ったという、はっきりした証拠はないようである。

三、四年前にNHKテレビの「日本人の質問」で、平賀源内がとりあげられたときも、やはりウナギの引き札について触れていた。この放送の最後に芳賀徹さんが解説をしておられたので、早速、「ウナギの引き札」の典拠を問い合わせたところ、つぎのようなお返事をいただいた。

拝復 御質問のお手紙を拝見いたしました。さすが痛いところを突かれたと思いました。鰻の蒲焼のことを「サイテヤーク」と言ったなどとは、源内の、あるいは源内関係の文章のどこにも出てきません。（中略）『平賀源内全集』の上巻の「飛花落葉」の中に「はこいりはみがき漱石香」と「きよみずもち」と「麦飯ひきのやから報條」の三小篇が載っていて、いずれも痛快な文章です。

「土用の丑の日」

のうなぎ宣伝も大いにありえたというところ。なにとぞ御容赦のほどを。

早々

たしかに、このあたりが「土用の丑の日の鰻」の出所のように、当時の広告界の人気者だった平賀源内が「土用の鰻」の宣伝にかつぎだされたとみるのが妥当なところであろう。

## 2. 日本一短い手紙

越前（福井県）丸岡城主・本田飛弾守成重（幼名・仙千代）の父・本田作左衛門重次が、若いころに妻にあてた手紙

一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ

は「日本一短い手紙」として、丸岡町の町おこしに大いに貢献している（福井県丸岡町『日本一短い手紙 私へ 一筆啓上』角川書店・1991年・平成3）。

福井大学で開催された、2001年度国語学会秋季大会の翌日、丸岡城を訪れて資料館でこの手紙の出典を尋ねてみた。その場では返事をもらえなかったが、後日丸岡町商工観光課から、「出典資料は見あたらない」というご連絡をいただいた。

そこで、当時、福井大学におられた、小川栄一さんに問い合わせたら、神沢貞幹の『翁草』と、明治時代の雑誌『三百諸侯』の二つを指摘してくださった。

江戸時代の神沢貞幹の随筆『翁草（1791年・寛政3）』にこの手紙が「一筆申す 火の用心 おせん病ますな 馬肥せ」の形で出てくることは知られており、小著『日本語の位相と位相差（明治書院・1999年・平成11）』にも引用しておいた（243ページ）が、原文は、つぎの通りである。

作左衛門は萬づ無造作にて、或る時御用にて遠所に滞留して、留守の妻へ送文に、一筆申す火の用心おせん病ますな馬肥せと書送しとぞ、おせんとは女の名なりとかや（巻之百五十五「小牧長久手戦後家康公上洛の事」の条）

一方、『三百諸侯』は戸川残花（安宅）が主宰し、博文館から1894年（明治27）3月に創刊された雑誌で、その巻之五・第三本田の「本田作左衛門」の章に、つぎのような記述がある。

重次の人となりは斯く<sup>か</sup>の如し、或時<sup>たび</sup>旅より女房<sup>にようぼう</sup>の方へ書状<sup>かた</sup>をおくり、

一筆申す火の用心、おせん、やさすな

馬こやせ、かしく

と書<sup>か</sup>きし人なり。おせんとは一子仙千代のことなりとぞ。文勢<sup>ぶんせい</sup>直截<sup>ちやくせつ</sup>にして百丈の瀑布<sup>ばくふ</sup>に對<sup>たい</sup>するの觀<sup>くわん</sup>あり、重次と云ふ魁偉<sup>くわいゐ</sup>の好漢<sup>かうかん</sup>が字句<sup>じく</sup>の間に彷彿<sup>ほうふつ</sup>として隱現<sup>いんげん</sup>するを見る。（「衆中にて家康を罵る事」61ページ）

ご覧の通り「一筆申す 火の用心 おせんやさすな 馬肥やせ」である。「やさすな」には「瘦さすな（瘦セサセルナ）」が、当てられようが、当時、武蔵大学におられた石井久雄さんに、この話をしたら、「や（さ／ま）すな」は、草体の「ま（満）」と「さ（佐）」の混乱とも考えられるのではないかという見解を述べられた。

『翁草』も『三百諸侯』も、本田作左衛門の時代から200年～300年の時を経たものであり、原形を伝えているかどうかは疑問である。しかし、現在のところ、「（おせん）泣かすな」の典拠は見あたらない。

冒頭の「一筆啓上」はいずれも「一筆申す」となっている。「一筆啓上」も「一筆申す」も、手紙の頭書としては古くから用いられたものなので、どちらもありうるが<sup>1)</sup>、この手紙に、実際にどちらが使われていたかは定かでない。

また、『三百諸侯』は、上にある通り「おせん」を嫡男・仙千代（のちの丸岡城主・本田成重）とし、『翁草』は娘としている。この点もはっきりしない。

結局、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の典拠はわからずじまいになってしまったが、ながく都立高校の国語の先生をしておられた、曽根脩さん（元・都立江戸川高校長）によれば、この手紙は、典拠や由来の不明なものの例として、司書研修でとりあげられるほど、図書館関係の人々の間では有名なものだという。

### 3. 京へ筑紫に坂東さ

1608年（慶長13）に刊行された、J. ロドリゲス（Joao Rodriguez）の『日本大文典（Arte de Lingoa de Iapan）』に「京へ筑紫に坂東さ」のことわざが掲載されていることはよく知られているが、この箇所には、つぎのような説明がついている。

都では助辞Ye（へ）を用ゐるが、これが正しいのであって、下（しも）では大部分の地方でNi（に）を用ゐ、関東では助辞（Sa）を用ゐる。それ故一つの諺、即ち、ある言ひ種が日本に行はれてゐる。それは次のやうにいふ。

Quioye, Tsucuxini, Quanto I, Bandosa（京へ、筑紫に、関東、又は、坂東さ）諺その意味は、都ではYe（へ）を、下ではNi（に）を、関東ではSa（さ）を使ふといふのである。（中略）諸地方に色々な助辞があるけれども、常に都に於けると同じくYe（へ）を用ゐるのがよい。それが正しく且上品だからである。

（土井忠生・訳『日本大文典』三省堂・1955年・昭和30・407～8ページ）

J. ロドリゲスは、この『日本大文典』のなかで、外国人宣教師の学ぶべき日本語は「一般に通じる言葉遣として日本全国の権威ある人々や文学者によって承認され、主として『都』で『公家』の用ゐる言葉」であるべきだとし、さらに、つぎのようにのべている。

如何なる言葉遣であっても、日本の諸国諸地方で地方人の或者が不正確に用ゐてゐるものは、この国に於ける欠陥とされ、粗野とされる色々な訛謬や不正確な言葉遣を持ってゐるから、それを取るべきではない。(316ページ)

したがって、J. ロドリゲスは、少なくとも当時の京都の言葉については、かなりの見識を持っていたばかりでなく、方言にも関心を払っていたものと思われる。<sup>2)</sup>

この『日本大文典』より約百年あまり前の、三條西実隆の『実隆公記』明応五年正月九日の条に、連歌師の宗祇の語った話として、つぎのような記述が見られる。

#### 宗祇談

京ニ、ツクシヘ、坂東サ、  
京ニハイクニユクナト云、筑紫ニハイツクヘユクト云、坂東ニハイツクサユクト云、又坂東ニハヨと云所ニ、ロト云詞ヲツカフ、セロ セロ也、如此境談アリ、

明応5年は、西暦1496年にあたるが、その40年後に抄物『四河入海（1534年・天文3）』には

日本デモ、筑紫ニ、京ヘ、坂東サト云類ソ（巻19-1）

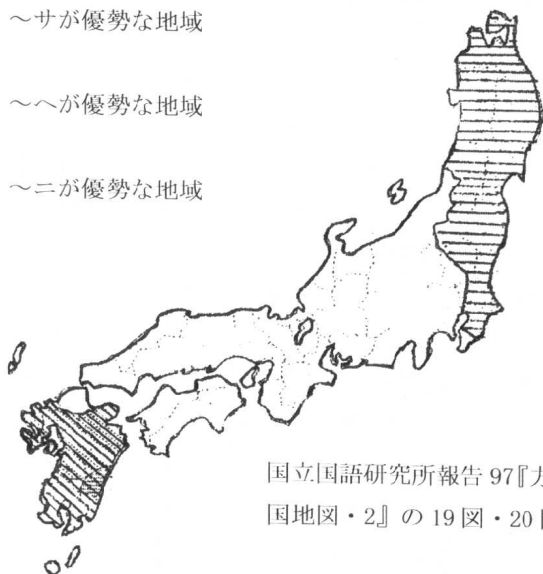
という記述がある。

古典語の「～ニ」と「～ヘ」については、青木令子さんのくわしい調査がある。それによれば、奈良・平安期を通じて、「～着く・～至る・～来（る）」など目標や到達点を示す場合は「～ニ」が用いられるのが普通だったという。しかし「～行く・～参る・～渡る」のような「自分から遠ざかる動作」の場合や、漠然とした目標あるいは、遠い場所を目指す場合には、古来「～ヘ」も用いられ、これが「～ヘ」は「方向を表す」といわれてきた理由だろうとする。院政・鎌倉期から「～ヘ」は次第にその用法を広げ、

~~~~~ ~サが優勢な地域

□ ~へが優勢な地域

////// ~ニが優勢な地域



国立国語研究所報告 97『方言文法全
国地図・2』の19図・20図による

図1 「東の方(サ・へ・ニ)行け」

「東京(サ・へ・ニ)着いた」をどうするか

時代とともに「~ニ」にとってかわって「~へ」が優勢になってきたという。³⁾したがって16世紀末から17世紀初頭の『日本大文典』のころには、京都では、すでに「~ニ」から「~へ」に移行していたとみることができる。

しかし、『実隆公記』『四河入海』の「筑紫へ」の方はどうもよくわからない。「筑紫」は、いうまでもなく今の九州地方をさすものであるが、九州は「~ニ」が優勢な地域であり、国立国語研究所の『方言文法全国地図・2』の図19・図20でもほぼ全域で「~ニ」が優勢になっている(図1参照)。

幕末から明治以降の九州出身の作家と江戸・東京生まれの作家について「~ニ」と「~へ」の使用状況を調べた鶴岡昭夫さんの調査⁴⁾があるが、この調査でも、九州出身の作家は「~行く」の

場合も「～来る」の場合も、「～ニ」を用いる傾向が強いことを指摘している(図2参照)。

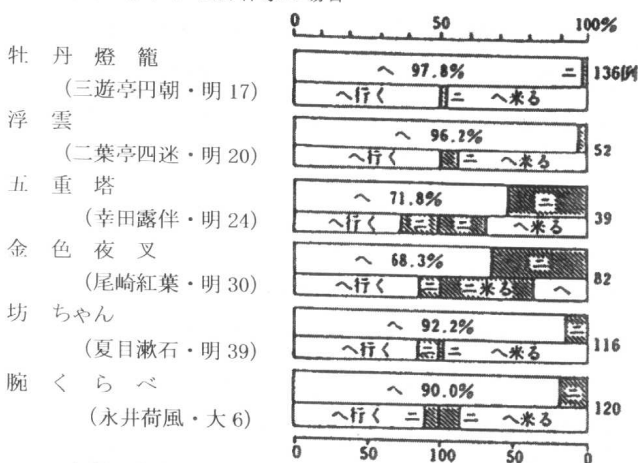
「～へ」から「～ニ」への史的变化はちょっと考えられないので、このあたりは方言学の知見を得たいところである。

最後の「坂東さ」は、近年まで、関東から東北一帯は「～サ」の優勢な地域であった⁵⁾。しかし、江戸ことばの資料では「～サ」は田舎者のことばを描写したような場合に限られ、一般には「～へ」が用いられていた⁶⁾。これは、西の方から移り住んできた上方の商家や徳川家臣団によってもたらされたものであろうが、江戸ことばが周囲の関東方言と際だった違いを見せ、いわゆる「言語島」を形成している典型的な例といえる。

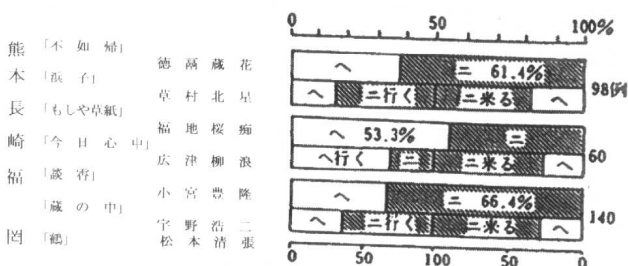
江戸ことばに「～へ」が多用されていたことは、早く湯沢幸吉郎さんが『江戸言葉の研究』で指摘しているが⁷⁾、「～ニ」が一般化するのには明治以降であり、これは明治期における九州勢の東上の結果とみられる。これによって、東京のことばの中に「～ニ」と「～へ」が共存することとなり、その間に微妙な使い分け、すなわち「～ニ」は帰着点を表し、「～へ」は方向を表すといった用法上の分化が生じてきた。こうした使い分けを否定するわけではないが、「(低気圧が) 東ニ／へ進む」はどっちだといわれたら、東京出身者でも決めかねるほど微妙な差違であり、こうした違いを、あえて教育の場に持ち込むことは慎むべきであろう。こんなことよりも、出身地によって「ニ」を使いやすい人と「へ」を使いやすい人とがいるという、とらえ方の方が、日本語の現状を正しく伝えることになる。

ところで、この「京へ 筑紫に 坂東さ」について、京都市の横井清さんが、京ことばは「～ニ」であるとする、つぎのような発言を『ぶっくれっと・98(三省堂・1992・5月)』によせている。

・A 東京（江戸）出身作家の場合



・B 九州出身作家の場合



(鶴岡昭夫「近代口語文章における二とへの地域差」による)

図2 「二」と「へ」の消長

(前略) 京ことばでは、「方向をしめす助詞」として常用され続けてきたのは、圧倒的に「に」である。(中略) 数年ぶりに、市内で手広く酒類販売会社を営む小学生時代の友人T君（下京区）に電話してみた。即座に明快な答えが返ってきた。言われてみればそのとおりで幼少時より一貫して「に」だと断言し、「何処何処へ…」という場合もちろんあるが、それは改まった感じで物言いをしている時だと思う、との由。